

水の都おおがき

短編小説コンクール

優秀作品集 2024

令和6年度 第4回

水の都おおがき

短編小説コンクール

優秀作品集 二〇二四

読んで知り、考える。書いて知り、考える。(選評)

審査員長

中村航

第四回を迎えた水の都おおがき短編小説コンクールだが、今回で一区切りということになった。主催の大垣市文化事業団のみなさんや、選考を手伝っていただいた樋口健司先生、天岡久美子先生、また何より応募してくれたみなさんに、深く感謝したい。

このコンクールを通して、新しく知ることは多かつたし、また考えさせられることも多かつた。読書体験という言葉があるが、まさに小説を読むことによって、大垣を知り、大垣を体験できた気がする。たいへん有意義な時間を過ごさせてもらったと思っっているが、それはきっと応募していただいた方にとっても同じだろう。

小説を書くのは、自分が既に知っていることを、ただ文字にしていくといった作業ではない。他者に向けての言葉を紡ぐのは簡単なことではなく、言語化するために考え、想像し、知ろうとする。作者は作品を書くことで、大垣のことを深く知れただろうと思う。応募者のみなさんにはこれからもぜひ、小説を書く機会を持って、作品を残してほしいと思う。

今回のコンクールで大賞に選ばせてもらったのは、「ハリヨも喜ぶ」だ。「見合い」をテーマ

としながら、しつかり恋の生まれる予感もあって、爽やかさを味わえる作品だった。素晴らしいのは主人公の「人間」が良く書けていて、深さのある物語に仕上がっているとこだ。幼い頃から「背の高い女の子」ということがいちばんの個性と人から見られ、自身はコンプレックスを感じながらも必要以上には気にせずのんびり生きてきた、そんな作品以前の、容子の人生さえ読み取ることができた。

優秀賞に選ばせてもらったのは、「北口の夜」。自分勝手に大らかな姉・夏季と、小さなことで口うるさい妹の冬華。姉妹の性格の違いがよく表れ、対比が効いていた。友人の舞、脇役の軽トラの親子も同様で、始まりと結末での変化もあり、それでいて作品の長さ（短さ）も意識され無駄な部分がなかった。8歳のジェームズの描き方も秀逸。読後感も良い。

佳作「削られていつか消えるまで」は、信奉していた祖父を亡くした主人公の、声にならない慟哭のような物語だった。この想いがいつまで燻り続けるのかという苦悩と、いつまでも手放したくないという相反する気持ちの狭間で、静かに荒ぶる主人公の痛みが伝わってきた。

以下は惜しくも選には漏れてしまったが、一次選考を通過した作品についての評になる。どれも力作で面白かったが、惜しい、と思った点についても書いておく。

「鯉のうえ」は、たらい舟を漕ぐ男性と、少年の心の交流が暖かく、節度のある距離感をもつて程よく描かれていた。読後感も良いし、情景の描かれ方も美しく、大垣の雰囲気も伝わってきた。それぞれの内面を描きすぎないようにという配慮かもしれないが、視点者をおじさんか少年のどちらかに固定したほうが、より読みやすくなっただろう。

「今年も温かい」は転がるような心理描写が心地よく、主人公の一喜一憂する想いがよく伝わってきた。このあと主人公が目的を果たし、店主の女性と交流する様子も浮かんでくる。冒

頭でもっと厳しい寒さを演出すると、「今年も温かい」というタイトルをより活かせたと思う。またせっかく一人称小説なので、主人公のプロフィールや、聖地巡礼するほどのマンガ・アニメ好きな面など、もう少しキャラクターがわかるような描写・記述があると良かったと思う。「向日葵の頃」は、病身の妻と夫の愛が感じられ、ひまわりとドクタイエローが見事にマッチしている、佳く練られた小説だった。終盤がやや性急に結果を描いてしまった印象があり、未来に光が差す予感、でとどめても良かったかもしれない。もしくは時間を飛ばして、後日の病室の様子などを描く、などでも良いかもしれない。

「母ちゃんの神芝居」は、認知症の母と初老の息子との心温まる心の交流が描かれていた。どんなに脱線させられようと、根気強く答えを返し紙芝居を続ける息子の、母親に対する愛情と敬意が行間から滲んでくる。最後のまとめ方にやや強引な印象があって、「六十年前には、母が私に紙芝居をみせてくれた」という展開は唐突すぎたかもしれない。

「終点、大垣です」は、意図せず日常を外れたことへのわずかな背徳感と、それをも含めて非日常を生きたことの期待感に、わくわくする気持ちが抑えられない主人公の気持ち、ささやかな幸福感を持って良く伝わってきた。この大学生の冒険は、読み手には大げさであるようにも思われるかもしれないが、これは一つの人生の契機になりえる。時や内容は違っても、普遍的で力強いエピソードだと思う。

「大垣夜行と箸袋」は東京と大垣を結ぶ夜行列車の記憶を、一組のカップル（のちの夫婦）の成り行きと重ね合わせて描いたセンチメンタルな物語。別れ際に箸袋になぐり書きされた電話番号が2人を結びつけ、「鉄子」となった娘が、駅弁の箸袋を手にするたびに幸福を感じるというエピソードは心にしみるエピソードだ。内容の多くが地の文でまとめて説明されてしまっ

ているのが、小説としては弱点かもしれない。

「芭蕉だって疲れる」はまずタイトルが良い。ツクダの年齢はわからないが、現代の若者の迷いの心情がよく描かれていた。カツラはツクダよりかなり年齢を感じさせない雰囲気、偶然の出会いからなりゆきで同道する流れをうまく作っている。カツラがどんな縁で住まいを大垣に決めたのかという理由がほしかった。

「三年二組おおがきレンジャー」は、幼少期の大切な思い出に背中を押されて成長した美智香の物語で、優しい気持ちになれた。回想にあたる、おおがきレンジャー結成エピソードが良く書けていると思うので、いっそのこと、幼少期を主体としても良かったかもしれない。

「おとうと」は、切ないファンタジー。夕夏が幼い頃に両親とともに事故で亡くなった弟の陽太が、お盆の四日間だけ夕夏に会いにくる。陽太の言う通り、夕夏がいつまでも立ち止まったままでいることが気になるので、なにかしらの一歩があると、悲しいだけで終わらない印象を持たせられると思う。

「とまれよ あそべ あそべよ とまれ」は、二十歳となり新たな世界に旅立つ娘に、大垣へと越してきた6歳の頃の姿を重ね合わせる母親の心情を描いた物語。生活も環境も大きく変わった不安を押し隠す娘の健気さに誓った「娘を守る」という思いが、十数年経ってやっと「それを果たせた」という実感として得られた母の、安堵や一抹の寂しさが、伝わってきた。「絹の昔語り」は、短いながらも読み応えのある作品だった。乳母というよりは母代わりとして愛情を注いだ、亡くなった坊っちゃんへの哀惜と思わせておいて、最後の最後で情念を吐露する姿は、絹の坊っちゃんへの想いが、母としての思いだけではないところが、深い業を感じさせた。

「前夜祭」は、文章に硬さが見られたが、年上の女性のしなやかさがうまく表現されていた。ピンヒールというアイテムの使い方も良かった。結末は美しい別れの物語としたほうが青年の成長譚になったような気がする。

目次

最優秀賞	ハリヨも喜ぶ	米澤 敦子	1
優秀賞	北口の夜	杉岡 弘康	9
佳作	削られていつか消えるまで	長尾 たぐい	19

最優秀賞

ハリヨも喜ぶ

米澤敦子
よねざわ あつこ

身長が一七三cmある。大きい女だ。男女入り乱れた場所ならば、そう目立たないかと思いきや、やはり突出して大きいのである。電車の吊り革にほんやり掴まり立ちしている時などは、トンネルに入るとギョツとする。真っ黒になった窓ガラスに映る自分一人が、並ぶ皆より頭一つ抜きん出て際立っているのだ。

子どもの頃も思春期も大きかった。

「モデルさんみたい。羨ましい」
小柄な同級生に言われるたびに、いやいや、モデルさんになれるわけないし、なりたくないし、と懨然とすること数多あった。

兎に角大きく力もあるので、小・中・高の友達からは「お母さん」と呼ばれ、高いところの荷物を下ろし、重い机をひたすら運んだ。

そして、恋人というものができなく高校の国語科の教員となった。まあ、仕様がな。体格、風貌もさることながら、自身に甘やかなところや、男性に対する執着がないからだろう。もちろん、恋人ができない原因は他にも色々あるのだが。以降、長く付き合う彼氏もできずに三十四歳になった。

最近ではコンプラやハラスメントという言葉のお陰で、世間は表だって結婚の是をせまることはない。しかし、岐阜県大垣市という地方だからなのか、身内だからなのか、令和の今に至ってもお見合い写真を持って来てくれる叔母がいる。ありがたいやら、情けないやら、己に甲斐

性無いこと甚だしい。

「容子ちゃん、この方一度お会いしてみない」

叔母は卓上に釣書をひろげ、スナップ写真を二枚ぐいっと私の胸元まで突き進めた。

「いい方なのよ。知り合いの息子さんなの。歳は三十八歳。温厚そうな佇まいよ」

「いい方なのに、どうしてお見合いするの?」

「いやねえ。我が身にふりかかるわよ」と言いながら、叔母は大皿に盛られた柿羊羹を、小皿に添えられた黒文字で突き刺してむしゃむしゃ食べた。つるりと光る、オレンジ色の柿羊羹二切れがあつという間に叔母の口に消えていく。ゼリーより重くねっちりと甘い柿羊羹の後に、美濃いび茶で口を落ち着かせ、

「この方、G大学の生物学の講師さんでね、御両親がそろそろ結婚に向かって、話しを固めていきたいのよ」

「ご両親がっていうのは?」

「光陰矢の如し、かしら。立派なお仕事されているけれども、のんびり構えていたら、あつと言う間におじさんになると、親なら当たり前前の心配しているのね」

「いや、でも、本人に結婚する気がないなら、それもちよつと」

叔母はまた柿羊羹を食べて、急須からお茶を湯呑に入れて、ぐびぐび飲んだ。

「容子ちゃん、結婚なんてその場のなりゆきみたいところ、あるのよ」

「そ、そう?」

座卓の天板にどっしりと置かれた柿羊羹に目を留めていると、漱石の『虞美人草』の場面が頭に浮かんだ。作中、和尚が、自分を訪ねてきた藤尾の母に「粗菓だが一つ御撮みなさい。岐

卓の柿羊羹」と言つて柿羊羹をふるまう件がある。そうして、和尚が独りでむしゃむしゃ食べる。和尚の息子曰く、「阿爺さん」は、和菓子子の「柿羊羹」や「味噌松風」を珍重するとある。『虞美人草』を読んだ時に、漱石が岐阜の、大垣市の菓子を書いてくれたことが嬉しくて心に残っていた。

「二、三日考えて、返事をして頂戴な」

「で、でも、向こうにお見合いしたくないって言われたら、」悲しい。

「ああ、大丈夫。姉さんに書いてもらった容子ちゃんの釣書と、写真を相手に渡したら、ぜひ会ってみたいって」と、笑った。

「お母さん、身長、一七三cmって書いた？」

この身長で断られることが多々あった。

「ちゃんと書いていたわよ。じゃ、お見合いの返事待ってるわね。雨が降りそうだから帰るわ。洗濯物干してきちゃったのよ」

叔母はひろげた釣書も私に寄越して帰っていった。確かに家の裏にある田んぼから、カエルの声騒がしい。六月の水田には水がタプタプにはられている。

夕方思いついて小皿に柿羊羹を入れて仏間に持って行き、仏壇に供えた。去年他界した祖母は柿羊羹が好きで、子どもの頃は田んぼ仕事が終わった祖母と一緒にいただいていた。

大きい女は他人に甘えたり、頼ったりすることが下手だ。親も大きい娘には自立への構えを説きがちである。期待に応えたくて、親には弱音を吐けなかった分、祖母には甘えたり、尋ねたり、愚痴ったりしていた。

和蠟燭に火を灯し、線香を立ててりんを鳴らすと、祖母と少し近くなるような気がする。

「おばあちゃん、どうしようか？」

漱石は『虞美人草』の藤尾を「嫌な女だ」とし、「あいつをしまいに殺すのが一篇の主意である」などと弟子への手紙に書きつける。けれども、明治の、所謂上流の娘は例外を除き、いかに良き伴侶を持つかが人生の最重要課題であった。家柄も美貌も才気もある藤尾が、自分で伴侶を（高飛車であるにせよ）選ばうと小野さんを翻弄したとして、先生そんなに目くじらたてなくてもなあと思う。先生、心のどこかでは闊達で、男をあしらう女も結構好ましく思っていたんじゃないかしら。

和蠟燭の炎がひときわ揺らぐ。「馬には乗ってみよ人には添うてみよ」と祖母のような、将来に不安な自分のもののような声が頭をかすめる。在りし日のようにカエルは鳴く。

見合い相手の恩田さんは朴訥を絵に描いたような人で安心した。黒縁眼鏡の向こうにある程よい大きさの二重瞼の目はロバを思わせた。叔母は二人を引き合わせると、当世流に早々と和風カフェから出て行ってしまった。

「僕ね、山下さんに会ったことあるんですよ」と、恩田さんが屈託のない笑顔で私を見た。

「え、」

「もちろん山下さんは僕に気付いてはいなかったです」

「どこでお会いしていたんですか？」

「去年の夏の水門川クリーン作戦です。参加されてましたよね」

大垣市では、八月上旬に「水都まつり」が催される。その際に万灯流しをするのだが、「水都まつり」に先駆けて、灯籠を流す水門川をボランティアの市民、企業、団体など何百人も集

まり、水門川クリーン作戦と銘打った清掃を行う。川を堰き止め、ポンプで水を汲み上げ、人が入って掃除できるようにしてゴミを集める。護岸や橋も清掃する。

「はい。私はボランティアサークルの生徒の付き添いとして、参加していました。暑い日でしたよね。いらしてたんですか？」

汗でびしょびしょ、お化粧も流れ落ち、髪の毛もベタベタ、泥まみれになっていたことを思い出した。

「僕も大学の学生たちと一緒にでした。お見合いの写真を見た時に、去年参加していた人だとすぐにわかりました」

「そ、そうですね」

母は一体どの写真を持って行ったのだろうか。

恩田さんは、ロバのような目を私に向けた。

「僕は大学で、ハリヨの保全や繁殖をテーマにしています」

「大垣市の魚に制定されたハリヨですか？」

「はい。よくご存じで」と嬉しそうに頷く。「ハリヨは生息条件が厳しいので、絶滅も危惧されています」ハリヨのことは、実はよく存じていないが大そうな事態らしい。

「ゴミ、捨てられていましたね。陶器や瓶や缶まで。分別も大変でしたよね」

「かっこいい女の人がいるなあって、僕、山下さんをちょっと見ていたんです」

「え？」

「山下さん、分別された陶器や瓶の袋をがつり何度も運んでいたでしょう」

「あ、ああ」引率していたもので。

「そのあと、ゴム長靴を運動靴に履き替えて、護岸によじ登って、雑草を引き抜いたり、汚れを落としたりしていましたよね。山下さんの姿、ひと際目立っていました。忍者みたいでほれほれました」

いやいや、生徒も頑張っていたし。お仕事だからです。私は決してボランティア精神の高い人ではないんです。し、しかも忍者って。

「ハリヨも喜んでいます。僕も何だか嬉しかったんです」

「いえいえ」ハリヨの事は知らないんだって。

「労を惜しまず、何て清々しい人だろうと思って見ていたら、学生に叱られました」

「いえ、本当にそんな立派なものではないんです。暑いし汚いしゴミは重いし、汚した人間を罵っていました」と言うと、我が意を得たりとばかり恩田さんはゲラゲラ笑った。

「僕は、また会いたいなあって思っていたら、一年経ってこんな形で会えました」

「え、」三十四年間生きてきて、こんなにサラリと「会いたい」などと言われたことはなかったから、びっくりした。その飾らない一言に照れた。確実にセロトニンの分泌量が増量していると、体感した。つくづく、言葉というものの作用に恐れ入った

「山下さん、今年の水都まつり、行きませんか？ 水門川の万灯流し一緒に見ませんか？」

「万灯流しですか」

「夜の川面に、光る灯籠が何百基も流れて、ちよつとないくらい見応えがあります」

カエルの鳴き声が何処からか聞こえてくる。テーブルにはお茶請けの柿羊羹がのっていた。今も昔も、人は胸がときめいたり、誰かを好きになったり、腹を立てたり、泣いたり、求めたりをしながら時間の川を流れていく。恩田さんが流れていく川にちよつと一緒してみてもい

いでしょうか？

「じゃあ、今年もクリーン作戦に生徒と参加して、水門川、綺麗にしておきますね」と拳を握ると、恩田さんは破顔して、「やっぱりかっこいいなあ」と褒めてくれた。

優秀賞

北口の夜

すぎおか ひろやす
杉岡 弘康

夜も11時を過ぎると大垣駅の北口を歩いている人はほとんどいない。ローソンの青い光だけでは、とても岐阜県第二の都市には見えないだろう。繁華街の南口とは雲泥の差だ。

私は姉の迎えのため、愛車のハスラーで北口のロータリーをゆっくり回る。すでに数台の車が停車場で待つており、私は白い軽トラクの後ろに停めた。軽トラのステッカーは剥げ落ち、藤、造、園という文字だけが読める。車のナンバーは『・510』。おそらく「後藤造園」だ。私は、この一人で待つ夜が嫌いだ。何の生産性もない、孤独な時間……。でも、他のお迎えの車が救ってくれる。そう、待つてるのは私一人じゃない。同士がいる。勝手に仲間意識が芽生え、孤独が共有され少し心が安らぐ。

23時23分。大垣駅着の電車が到着する。ここからはライバルだ。お迎えの車の中で誰が一番に抜け出せるか。賞品は、優越感。さあ、レースの始まりだ！

意外にもエスカレーターを一番に降りてきたのは姉だった。よっしゃ。私はブレーキを踏み、エンジンをかける。しかし、姉はローソンに入ってしまった。何で…。

前の軽トラの運転席から五十代位の赤い帽子を被った男性が出て、手を振る。その先に黒メガネの高校生位の女の子。おそらく父娘で、名古屋の進学塾に通っているのだろう。しかし、女の子はツンとして無言で乗り込む。思春期か。車内の会話はゼロと推測される。

他の車は消え、私とタクシーだけが残された。遅い…。あきらめてスマホに目を落とすと、突然ドアが開く。

「ただいまマーガリン！」

「マーガリンじゃないよ、遅い！」

姉・夏季がお礼も言わずに乗り込んでくる。

「冬華、ノリ悪ッ！ おかえリンゴジャムくらい言ってほしいな」

「そんなテンションじゃないわよ。つーか、何でローソン寄つてんのよ。普通、迎えに来てもらってたらさ、真つすぐ来るでしょ」

「はい、これ」

コンビニの袋の中はエッグタルト。

「冬華、好きでしょ？」

「好きだけど…。ちよっと！」

姉はおもむろに靴下を脱ぎ始めた。

「ここ、車の中。てか、これ私のじゃん。朝、探してたんだよ」

「冬華の？ 道理で見たことないと思っただよね」

「見たことない靴下、よく履けるね」

「ごめん、ごめん、怒らないでよ」

「怒つてないわよ。私は別に靴下を勝手に履かれたとか、そういう細かいことを言ってるんじゃないの」

「じゃあ、何でイラついてんの？」

「イラついてませんけど」

「イライラかゴキケンかと言ったら？」

「それはイライラの方。でも、限りなくゴキゲンに近いイライラよ」
 「5段階で言ったら？」

「…4」

「結構、イライラじゃん」

「そりゃ、イライラもするわよ。だって…」

急に姉の携帯の着信音。こんなときに！

「ごめん、冬華。ハイ、ジエームス！」

ジエームスって誰よ…。もう、夜遊びは勘弁してほしい。

私はアクセルを踏み込み、バス停を横目にロータリーを出て行った。いつのまにか次のお迎えが数台停まっている。お疲れ様です。

数日後、親友の舞と柘カフェでランチを取った。柘の壁やテーブルなど柘づくしの店内。人生でこれほど正方形の優しさに囲まれたことはない。90度の集合が、私のイライラのツボを押して緩和してくれる。しかし、姉のことを話し始めるとイライラが抑えきれない。

「で、結局、ジエームスと2時間も電話してんのよ！ ひどい話でしょ、舞」

「待って、冬華。すごい聞きなれないワードが出てきたんだけど。ジエームスって誰？」

「お姉ちゃんの彼氏じゃない？」

「天真爛漫なお姉ちゃんじゃん」

「あれは無神経って言うの。だって布団の上でタルト食べて、その上で平気で寝てんのよ。布団の上で衣・食・住すべてやっちゃうんだから。っで、掃除するのはいつも私。これじゃあ、

どっちが姉か分かんないわ」

「何もやってくれないんだ？」

「そう、二人で住んでるのに家事は全部、私任せ。私は家政婦じゃないっつーの」

「いっそのこと仕事やめて家事手伝いにでもなったら？」

「ダメよ。お姉ちゃん、まだ学生だもん」

私は今春、短大を卒業し、姉は大学4年生。私は春から姉と一緒に住み始めた。

「冬華、もう家を出ちゃったら？」

「そうしたいけど、私から切り出したなら、何か私の器が小っちゃいみたいじゃん」

「…そんなことないよ」

「今、面倒くさいって思ったでしょ？ いいの、私は妥協しながら生きてくから。妥協って漢字には女があるでしょ。女は妥協する宿命なのよ」

「お姉さんも女だけだね」

「とにかく夜遅いのだけは勘弁。今日こそ言ってるんだから！」

その晩も、私は大垣駅の北口で待った。今日も後藤造園の軽トラの後ろだ。後藤造園のお嬢様がエスカレーターを降りてきて、無愛想に車に乗り込む。おそらく今日も会話はゼロだろう。あー、無言で理解し合えたら、どれくらいラクだろう。でも、ダメだ。今日は言うって決めたんだから。

しばらくして、姉が車のドアを開ける。

「冬華、ただいまレーシア！」

「お姉ちゃん、そのくだらない挨拶やめてよ。イラツとすんの」
「またまたー」

ギアをドライブに入れ、車を走らせる。

「お姉ちゃん、話があるんだけど」

「私も」

「何？」

「冬華からどうぞ」

「お姉ちゃんから言ってる」

「分かった。あのね…」

「ちょっと待って。やっぱり私から言わせて。お姉ちゃんが先だと調子くるいそう」

「あっ、そう。じゃあ、どうぞ」

「一つ言わせて。あのね…あーッ!!」

姉が車の中でタルトを食べようとしている。

「お腹、空いちゃって」

「誰が掃除すんのよ！ お姉ちゃん、ダラしなさ過ぎるよ。今、二人で住んでんだから、もつと掃除とか洗濯とか協力してよ」

「それは…私もやろうと思ったよ。でも、冬華、こだわりハンパないでしょ。柔軟剤入りの洗剤じゃなきゃダメとか、TシャツとGパンと一緒に洗っちゃダメとか。私、やんない方が良かったと思って」

「だったら言ってるよ。その件は分かった。あと…」

「一つじゃなかったの？」

「こっちが本題」

「はあ…」

「面倒くさいと思わないでよ。いいわ、お姉ちゃん、先に話してよ」

「いいの？」

「後で言うから」

「私ね、ウチを出てくわ」

「はっ？ 何で？ 私が細かいから？」

「細かいのは昔からでしょ」

細かいとは思ってたんだ…。

「もしかして、ジエームスと住むの？」

「何で分かったの？」

「マジで？ 同棲すんの？」

「ホームステイよ。私、ドイツに語学留学するの」

ドイツのシュツットガルト市は大垣市の姉妹都市だ。

「お金は？」

「大丈夫、バイトして貯めたから」

「夜、遅かったのって？」

「うん、海外に住んでる人に日本語を教えたの。時差で深夜しか教えられなくてさ」

「ジエームズは？」

「あの子は、私の教え子」

「あの子？」

「8歳なんだけど、日本が大好きでさ。何か話の流れで、ジエームスのウチにホームステイすることになったの」

「夜遊びじゃなかったんだ？」

「冬華の本題は？」

「もういい。解決したから」

三カ月後、姉はドイツへ旅立って行った。

その半年後、舞に迎えを頼まれ、久々に大垣駅へ行った。姉が旅立って以来の北口。相変わらずの静けさだ。

後藤造園の軽トラを見つけ、後ろに停める。しばらくして、お嬢様が近付いてくる。何だか笑顔だ。軽トラに手を振っている。志望校に合格したのだろうか。暗くて見えないが車内は明るそうだ。良かったね、お父さん。

携帯の着信音にビクツとする。

「グーテン・ターク、冬華！ 元気？」

「お姉ちゃん、久しぶり。でも、こっちは『こんばんは』だよ」

「しまった！」

「何？」

「グーテン・たくあんって言えば良かった」

「もうッ！」

私が孤独な夜を感じているとき、姉はドイツで元気に暮らしている。そう思えば、嫌っていた夜が楽しくなった。そうそう、最近ちよつと無神経になろうと思って布団の上でタルトを食べてみた。意外と爽快だった！

佳作

削られていつか消えるまで

ながお
長尾 たぐい

祖父の右人差し指は潰れていた。子供の頃、脱穀機に巻き込まれたせいだった。切断は免れたものの自己流の治療のせいで、人差し指の先端と爪は丸い円を描いていた。祖父はそれを気にしていただろうか？ 私には分からない。

「フズリナの化石、じいちゃんの爪みたいだね」

「ほうか。……確かにそうとも見えるな」

金生山の化石館で、祖父が笑いながら古生代を生きた原生動物の化石の隣に手を置いてみせたことを覚えている。

——ご乗車いただきましてありがとうございます。特別快速大垣行きです。次は穂積に停まります。

視線を上げると、車窓の外の太陽は落ちかけていた。橙色の空。三ヶ月前に祖父の遺骸を焼いた火葬場の炎は、こんな色をしていただろうか？ それも私には分からない。どうして自分がこんな時間帯に大垣へ向かっているのかも本当はよく分からない。

化石館に向かったところで、あのフズリナのループタイが手に入るわけではないのに。

「化石のループタイ？ それ、この前お線香上げにきたじいちゃんの石仲間にあげちゃったわ。欲しかったなら言うとなつてくれたら良かったのに」

私の問いに、リビングから奥まったところにあるキッチンから、祖母が叫ぶように返事をし

た。いつもは気にならない、こういう時の祖母の声の他責の響きが耳を抜けて、脳みその中でシミになる。私は、ハ、と口を開けたまま二の句が継げないでいた。衝動のままに前髪を何本か掴んでブツブツと引き抜く。小さな痛みが、心の中の大きなうねりを鎮めた。私は努めて明るい声で返事をする。

「いいよ。私より、その人の所に行った方が石も幸せかもしれない」

「そう？ じゃあ、残った石は全部よっちゃんにあげるわ。春子も拓郎も石に興味ありやせんし」

「ありがと。じゃあ、もらう」

キッチンから祖母が茹で上がった素麺を持って現れた。指定時間より長く茹でられた祖父好みの柔らかい麺は、相変わらずの掬えどころのない舌触りをしていた。

享年八十三の私の祖父は博識で、そして気性の激しい人だった、らしい。今よりずっと大学進学率の低い戦後すぐの時代に、その頃、岐阜の花形産業だった林業について大学で学び、林業団体に勤めて昭和期の全国を転々とした。祖父の娘、春子と息子、拓郎——私の母と叔父からは「優秀だったらしいけれど、世渡り下手で偉い人の怒りを買ってあちこち飛ばされたんだ」と転勤に連れまわされた恨み言をよく聞かされた。その一方で、ひとり孫の私が思春期に入るころ、つまり祖父が定年退職して長らく経ってからも、祖父母宅にはかつての勤め先や取引先の人間から毎年大量のお中元やお歳暮が届いていた。「敵も信奉者も大勢いる人」と子供二人は苦い顔で自分たちの父親をそう評した。

私はたぶん一番若い祖父の信奉者で、同時に祖父によく似ていた。祖父から罵倒や折檻された覚えはない。それは母いわく、幼い私のけだものじみた気性に祖父が折れたからだという。

二歳の私は食卓でニンジンを残したことを祖父に厳しく咎められて、激しく暴れた上に、座っていた椅子ごと後ろに倒れて失神したという。私はそのこともまったく覚えていない。私にとって祖父は敬愛すべき師だった。多忙な父と病気がちな母に代わり、路傍の花や空に浮かぶ雲について、庭で出会う虫や鳥について教えてくれたのは祖父だった。

そんな祖父は自宅の書齋に、仕事に関する書類、紙に貼った新聞の切り抜きをクリアポケットに入れて作ったスクラップファイル、書籍に雑誌、あちこちの学会誌、そして鉱物や化石の標本を十六畳の部屋にうずたかく積んだまま逝った。「四十九日も初盆も過ぎたし、書齋を片してくれん？ 大学も夏休みになったでしょ」という祖母からの電話に応じて、私は名古屋の祖父母宅に赴いた。

書齋の中の何を捨てても、何を持って行ってもいい。祖母はそう言った。これを機に、戦前からある自分の実家を畳んでゆくつもりだった。祖母は間違っていない。家に対する割り切りも、おそらく祖父を信奉していた訪問者に形見分けをするのも。けれど、という思いの先に続く身勝手な感傷を、私は心の底に沈めた。

昼食の後、午前中にしていた作業の続きに取り掛かった。スクラップファイルを開いて、中の紙を取り出し、高島屋の一番大きな紙袋に突っ込み、ファイルはプラスチック資源ごみ袋の中に積み上げる。いつも私を悩ませている手の平の汗は、紙に吸い上げられてすぐに出てこなくなった。紙袋と資源袋は、祖母が持ち上げられる重さを超えそうになったら、取り換える。そうやって祖父の思考の、知識の、意識の地層の一部は一日かけて七袋分の雑紙ごみと、五袋分のプラスチック資源ごみになった。そして書齋には五十センチ四方の棚四つ分の空隙が生まれた。

それを見て祖母は「丸一日やってこんなもんかいな。先は長いわ」と溜息をついた。

「ともかくよっちゃん、今日はお疲れさん。ほれ、これ。残りのループタイ。じいちゃんの衣装箆筒から出してきた。持って帰れい」

祖母からずっしりとした手ぬぐいの包みが渡された。がちやり、と包みの中身が小さく音を立てた。

岩手の久慈産の虫入り琥珀、新潟のヒスイ海岸に辿り着いた翡翠、富山の人喰谷に潜む月長石、八戸の海岸に転がる赤い瑪瑙、美濃加茂で見つかったオパール化した珪化木、金生山で採れた小さな小さな三葉虫の化石が、リュックサックの中で音を立て続けている。

祖父母宅を出て、最寄りの地下鉄の駅に向かう道すがら、じりじりとした名古屋の残暑と、家路を急ぐたくさんの車が照り返す光が、そして背中で鳴る石たちの音が、昼間に収めたはずのうねりを再び呼び起こした。うねりはだんだんと大きくなり、気が付いた時には、私は名駅でJRの改札をくぐっていた。

大垣駅の構内には「大垣でちょうどいい暮らし」という広告が掲げられていた。名古屋からの移住を促進のためのものようだった。

祖父は大垣の貧しい家に生まれた。ひとつ違いの兄と歳の離れた弟がいて、兄からは頭の出来の良さを疎まれ、一方で弟からは信奉された、ようだった。祖父は私に大垣という町について多くのことを教えてくれたが、そこから祖父自身の故郷に関する思い出は巧妙に排除されていたことに、美濃赤坂行きの電車を待つ私は思い至った。ちょうどいい。さっきの広告を祖父が見たらどう思うだろうか。やはり私には分からない。

美濃赤坂駅に着くころには、日は完全に暮れていた。スマホの地図アプリを頼りに化石館を

目指す。人気のない、古い家の点在する街路を指示されるがままに歩く。

——四葉、しゃんとせい。ほれ、着いたらお菓子をはひとつ買ってやろう。

もう歩きたくない、と近所のスーパーまでの道の途中で、駄々をこねる私の手を引いてくれた祖父はもうどこにもいない。住宅街を入った所の神社の鎮守の森が暗くて恐ろしい。でも、行かなければという思いに突き動かされた。先に続く道はもう坂になっていく。神社の敷地の横、街灯はかろうじて視界を確保できる間隔にしか置かれていない。坂が続く。イザナギは黄泉平坂を下って黄泉の国に行った、そうだったよね、じいちゃん。私は坂を上るよ。

たどり着いた化石館は当たり前だけども閉まっています、中は真っ暗だった。私はそこから離れるようにさらに坂を——いや、山を登る。「夜間の通行はご遠慮ください」と書かれた看板の脇を通り、カーブした道を行く。

視界が開けて、右手に大垣の町の夜景が広がった。温かい人の営みが見て取れた。そして左手には闇が満ちていた。じつと目を凝らしていると、切り出されて階段状になった山肌が見えた。

——じいちゃん、この山さ、こんな風に削られちゃったらいつか無くなっちゃうのかな。——ほうかもしれんな。——人間は勝手だね、——ここはこんなにたくさん化石がある。「日本の古生物学発祥の地」なのに。——ほお、一人前に言いよる。——だって嫌じゃん、なくなっちゃうの。——俺もそう思うがな、削られていった山は——

——形を変えてどこかに残りつづけるんだ。

祖父は幼い私に少し嘘をついた。削られて後には、残るものと消えるものがある。だから私は、後者をもう少しだけ抱きしめていたい。本当に消え失せてしまうその日まで。

2024年度の
「短編小説コンクール 水の都おおがき」には、
72点の応募作品が寄せられました。
入賞作品の表記は、原作を尊重し、
それに従いました。

水の都おおがき
短編小説コンクール
優秀作品集 2024

令和7年2月23日発行

監 修 中村航

編集・発行 (公財)大垣市文化事業団

大垣市室本町五丁目51番地

(大垣市スイトピアセンター文化会館2階)

TEL.0584-82-2310

D T P 中田舞子

